

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	耳鼻咽喉科・小児科外来患者から検出されたメチシリン耐性黄色ブドウ球菌の各種抗菌薬耐性および遺伝学的性状に関する研究
作成者（著者）	吉田, 直美
公開者	東邦大学
発行日	2021.09
掲載情報	東邦大学大学院看護学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨.
資料種別	学位論文
内容記述	主査：湯浅玲奈 / タイトル：耳鼻咽喉科・小児科外来患者から検出されたメチシリン耐性黄色ブドウ球菌の各種抗菌薬耐性および遺伝学的性状に関する研究 / 著者：吉田直美 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第1019号
学位授与年月日	2021.09.28
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD28214225

2021年8月31日

審査要旨

学籍番号： ND13003 氏名： 吉田直美

論文題目：「耳鼻咽喉科・小児科外来患者から検出されたメチシリン耐性黄色ブドウ球菌の各種抗菌薬耐性および遺伝学的性状に関する研究」

審査日時： 令和3年8月31日（火）10：30～12：00

審査場所： 402 セミナー室

主査： 湯浅玲奈 副査： 小林寅詰、村上好恵

黄色ブドウ球菌(*Staphylococcus aureus*)はヒトの皮膚、鼻腔、口腔、腸管内に定着、生存している常在菌である一方、様々な毒素を産生することにより強い病原性を有し、化膿性疾患、食中毒、肺炎、全身性感染など各種感染症の起炎菌である。また、本菌の抗菌薬耐性菌である MRSA は免疫力の低下した易感染宿主へ深刻な感染症を惹起し、院内感染における主要な日和見感染起因菌である。しかし、1990年代には強い病原性を有し、市中において健常者にも重篤な感染症を引き起こす市中型感染 MRSA(CA-MRSA)が報告され大きな問題となっている。

日本における耳鼻咽喉科領域などから分離される *S. aureus* の動向は、慢性中耳炎など外来での分離頻度が高いものの MRSA の実態、特に CA-MRSA の感染状況についての詳細は明らかになっていない。

本研究は耳鼻咽喉科および小児科外来において、耳漏を伴う耳疾患患者および上気道感染症患者の臨床材料から分離された *S. aureus* を対象とし、各種抗菌薬に対する感受性を調査し、各種臨床材料由来の MRSA の各種抗菌薬耐性および遺伝学的性状の特徴を明らかにする。また、それらにおいて近年増加傾向にあるとされる市中感染型 MRSA(CA-MRSA)の分布と遺伝学的特性について明らかにすることを目的とした。

その結果、研究期間中に協力研究施設6施設の外来患者から分離・収集した663株の *S. aureus* より MRSA が126株検出され、その割合は全体で19.0%であった。これらの MRSA は施設の規模を問わず、クリニック、病院、大学病院いずれの施設からも検出された。しかし、その検出頻度は施設によって差を認め、クリニックに比べ病院で高い傾向が見られた。分離された MRSA 株は抗 MRSA 薬のバンコマイシンには全て感受性を示し、イミペネムを除く各種抗菌薬に対して約44%から83%耐性を示し、多剤耐性を示すことが明らかとなった。

これらの MRSA について遺伝学的解析により MRSA を市中型(CA-MRSA)および院内型(HA-MRSA)に分類した結果、中規模病院を除き CA-MRSA が多くを占めていた。その

一方、HA-MRSA も全体の 40%の割合で分布し、混在していることが明らかとなった。特に、病院などの有床施設における HA-MRSA の割合は約 78%と高く、この背景には医療環境の変化により外来患者においても繰り返し抗菌薬治療が行われること、および侵襲性の高い医療を受ける機会が増加したことが要因と考えられた。

また、株数は少ないものの CA-MRSA の強病原因子である Pantone Valentine Leukocidin 陽性を示す MRSA が 2 株存在した。外来においては比較的軽症な患者が多いが、近年では侵襲性の高い医療が行われることから、これらの株による重症化への注意が必要であることを指摘した感染制御学上有益な研究内容であった。なお、遺伝型解析によって得られた HA-MRSA の市中への拡大におよび PVL 陽性株の背景について加筆することが指摘され、最終論文に反映させることとした。

以上のことから、本学位論文は基礎と臨床を結ぶ研究上で極めて新奇性および独創性に富み、学位規程に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものと判断した。また、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な技術および研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定した。